

最先端の医療機器を設備して24時間体制で救急患者を受け入れ、地域医療を担ってきた救急指定病院

開設以来「救急車を断らない」というポリシーのもと、365日・24時間体制で年間約4,700台もの救急車を受け入れている三愛病院。最新の医療機器を設備し、外来診療では整形外科、脳神経外科、循環器内科をはじめ幅広い科目で患者の治療に当たっている。昨年、サテライトクリニック「陽まわりメディカルクリニック」を開院した同病院。“三つの愛と心”を理念に、よりいっそう地域医療に力を尽くしていく。



理事長 済陽 義久氏

- 代 表 者 理事長 済陽 義久
- 開 設 昭和60年4月
- 職 員 数 620名
- 事業内容 病院、診療所、健康管理センター等の運営
- 所 在 地 〒338-0837 さいたま市桜区田島4-35-17
TEL 048-866-1717 FAX 048-866-1865
- U R L <https://www.sanai.or.jp>

「患者さんへの愛と思いやりの心」「地域を愛する心」「医療に奉仕する心」——開設以来この“三つの愛と心”を理念に医療に携わる医療法人社団松弘会三愛病院は、“救急”“外来”“健診・人間ドック”の3本柱でバランスのよい病院経営を実現している。

救急は「救急車を断らない」という姿勢で、救急指定病院として365日・24時間体制で年間約4,700台もの救急車を受け入れる。外来は整形外科、外科、脳神経外科、内科、循環器内科、泌尿器科、心臓血管外科、糖尿病内科、皮膚科、リハビリテーション科など幅広い科目を有し、大学病院にも劣らない最新の医療機器と医療技術で検査・治療を行う。また同病院が運営する「さいたま健康管理センター」では、個人や企業の健康診断や特定疾患の有無を調べる検診、脳ドック、心臓ドック、乳がん検診等基本コースを中心に各種オプションも設けている。

「地域の方たちから眼科と耳鼻科を新設してほしい」という要望があり、2018年に眼科、2021年に耳鼻咽喉科を開設しました。糖尿病と目の病気は深く関係しますし、めまいの原因が頭にあると思ったら耳にあったりしますから、総合的に診て治療を行っています。患者

さんは『トータルで診てもらえる』と喜んでくださいます」(済陽義久理事長)

そのほか医療法人社団松弘会では、川越市に認知症の専門病院「トワーム小江戸病院」、指扇と熊谷に介護老人保健施設「トワーム指扇」「トワーム熊谷」を運営し、医療から介護まで地域住民を幅広くサポートしている。

➔ 開院以来24時間体制で救急を受け入れ

昭和60(1985)年、済陽理事長の父・済陽輝久氏によって同病院は誕生。一般病棟54床で歩みを始める。開院当初から急性期病院として24時間の救急医療体制を敷き、理念となる三つの愛と心に基づいて救急患者を断らずに受け入れ、旧浦和市(現・さいたま市)を中心に地域の医療を担ってきた。

「当病院の近くにバイパスが通っていることもあって、交通事故で運ばれる重症患者も多かったようです。父はどんな状況でも急患の受け入れを断りませんでした。常に病院で寝泊まりしていましたし、当時を知る年配の救急隊の人からも『あなたのお父さんはいつも病院に

いたよ』と今でも言われます」

平成11(1999)年、東棟が完成して病床数は126床に増床。平成16年には放射線治療装置であるガンマナイフを導入し、県内初となる「さいたまガンマナイフセンター」を開設する。以降、全身血管造影X線診断装置やレーザー光源搭載内視鏡、最新鋭のCTやMRI等を積極的に導入して病気の早期発見、早期治療に努め、質の高い医療を実践してきた。

「医療機器の設備投資をし、診療科目を増やし、病床数も増やしていきました。『後になって患者さんに手遅れの病気が見つかることがないよう、絶対に病気を見つける』という父のスタンスは今日まで受け継がれ、患者さんの全身をしっかり診ています」

また、医療法人社団松弘会の「トワーム指扇」「トワーム熊谷」「トワーム小江戸病院」の開設と併せて、同病院でも在宅復帰を支援するための“地域包括ケア病床”を開設。増え続ける認知症や慢性期医療のニーズにも対応できる体制を構築していった。

現在は、一般病床185床、HCU病床(高度治療室)4床、地域包括ケア病床10床の計199床と病床数を増やし、地域住民の医療と健康に寄与している。

➔ 最先端の医療設備が救急・外来現場を支援

大学病院並みの医療設備が整う三愛病院。

既述した「さいたまガンマナイフセンター」が設備するガンマナイフは、放射線の一種であるガンマ線を用いて脳の病巣を治療する装置だ。開頭手術をせずに脳内病変が治療できる、患者の体に負担の少ない脳外科治療の一つで、脳腫瘍や脳血管障害、てんかん、パーキンソン病など機能的疾患に対して効果をもたらしている。

同センターは平成16年の導入以来8,500件以上の治療実績を持ち、さらにはガンマナイフ治療と外科手術を組み合わせた手術システム等も開発し、患者の病状に合った最適な治療を行っている。

「MRI」においては、より高精細・高画質な画像を描出できる機器を導入し、これによって病気診断の精度

を格段と向上させることにつなげている。

「CT」は、わずか0.275秒で320枚の画像を撮影できる最新鋭の機器を設備。短時間で広範囲の撮影ができるため、放射線被ばくや造影剤の量を軽減でき、患者への負担が少ないのが利点だ。

さらに微細な血管狭窄や閉塞、動脈瘤、腫瘍の分布を見ることができる「全身血管造影X線診断装置」、鮮明で高画質な「8K内視鏡」、造影検査においてリアルタイムで観察することができる「X線透視撮影装置」、



(左) 三愛病院外観、(右) 院内内観



(左) ガンマナイフ、(右) 治療の様子



臓器を立体で捉えることができる「4D超音波診断装置」、「血管撮影装置」や高精度・高画質な画像を取得できる「マンモグラフィー装置」等。最先端の医療機器が同病院の救急そして外来の現場を支えている。

「24時間救急車を断らない体制を敷いても、医療機器が設備され十分な検査ができなければ適切な治療は行えません。そのためにも設備投資は必要だと考えています」

➔ 優秀な医師を確保し、ソフト面も整備

医療機器の設備というハード面だけでなく、確かな

医療技術を持つ優秀な医療従事者の確保、というソフト面も整えている三愛病院。これは長い時間をかけて大学病院と良好な関係を築き、優秀な医師を採用してきた済陽理事長の取り組みの成果だ。

また、医師に医療補助スタッフをつけて事務的なことを補助し業務負担を軽減。医師が診療に専念できる体制を構築するなど、働きやすい環境作りにも力を注ぐ。さらに医療現場では、医師をはじめスタッフがコミュニケーションをとりながらチーム医療を実現できる風通し



のよい風土も醸成されている。

「当院の脳神経外科は指導医が在籍し、大学病院の研修施設になっています。整形外科、循環器内科も大学病院医局からの派遣病院となっています」

消化器外科医である済陽理事長が父親からバトンを受け取ったのは平成28年。当初は、医療に従事しながら経営そして病院の運営・管理をトップダウンで行ってきた先代のやり方を踏襲していたのだが、大きくなった病院の規模に対応した組織のあり方を考える日々が続いたという。

「自走型の病院経営に移行する時機だと思い、小さな組織ピラミッドを多数作り、権限を委譲しました」

これが奏功して今では各組織が能動的に課題に取り組んで成果を出し、人材も育っているという。

→「陽まわりメディカルクリニック」開院

令和6(2024)年、同病院は武蔵浦和駅直結の商業ビル内にサテライトクリニック「陽まわりメディカルクリニック」を開院した。内科や感染症救急診療等を含む総合診療科を専門とし、診療時間は平日・土日(祝日休診) 18時30分までと、働く人や多忙な人が通院しやすい時間を設定している。

「忙しくて病院に行くのが難しい方々に日々の健康管理をしていただくため、地域のかかりつけ医として開設しました。そこで診療をして入院や検査が必要な患者さんは三愛病院で責任を持って診る。そうすることで地域医療に貢献できると考えています」

急性期の治療や検査が必要な場合は、カルテを法人内で共有するなど、三愛病院でのバックアップ体制も整えている。30～50代の働き盛りの受診者が多く、早くも地域のかかりつけ医として多くの人たちに頼りにされる存在となっている。

→ 3本柱で地域医療に貢献

今後も救急、外来、健診・人間ドックの3本柱で安定した経営を行いながら地域医療に貢献していきたいと語る済陽理事長。

「これまで同様に新しい治療、新しい医療技術を取り入れながら、『三愛病院に行けば大丈夫』と思ってもらえる病院であり続けたいと考えています」

令和6年は新たに「内視鏡・放射線治療センター」を開設。さらに健診センターもリニューアルし、よりいっそう早期発見・早期治療に注力していく体制を整えた。

理念である三つの愛と心で、これまでと同様に質の高い医療を行っていく三愛病院。同病院は、今後も陽まわりメディカルクリニック等と連携しながら、地域医療そして地域の人々の健康を支えていく。